

システムワークフロー検討作業部会 2021 年度上半期活動報告

各班の上半期の活動につきまして、以下の通りご報告いたします。

1. メタデータ流通の高度化検討班

・ 活動概要

- (1) 「これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針案」の作成（班全体）
- (2) メタデータ流通の高度化検討（電子）
- (3) NCR2018 適用の検討及び NCR2018 適用細則の作成（目録）
- (4) 著作の取扱い範囲の検討（目録）

・ 活動詳細

- (1) 「これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針案」の作成（班全体）  
昨年度までの検討を踏まえ、「これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針案」を 8 月末までに班ごとに分かれて執筆、完成した案を主査に提出し確認を依頼した。

- (2) メタデータ流通の高度化検討（電子）

JPCOAR、NDL など関連機関とデジタルアーカイブの流通に関する意見交換会を行い、JPCOAR スキーマの改訂案および NDL と JPCOAR が策定するガイドライン案の確認を行った。

[おもな対外調整]

- |          |                       |
|----------|-----------------------|
| 6 月 8 日  | NDL 打ち合わせ             |
| 9 月 1 日  | JPCOAR 打ち合わせ          |
| 11 月 9 日 | NDL、JPCOAR 打ち合わせ [予定] |

- (3) NCR2018 適用の検討及び NCR2018 適用細則の作成（目録）

NCR2018 適用について昨年度に引き続き検討を進め、和図書と逐次刊行物について、NCR2018 適用細則案の作成を行っている。

- (4) 著作の取扱い範囲の検討（目録）

NDL や他の書誌作成機関との情報交換会（9 月 3 日）に参加し、オンライン会議や ML での情報収集を行い、著作データを作成する資料の範囲の検討を行っている。

2. 統合的発見環境班

- ・ 活動概要

- (1) 「これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針案」の作成
- (2) 統合的発見環境に求められる要件の検討
- (3) 次期 ILL についての検討
- (4) 海外の ILL 運用についての調査

- ・ 活動詳細

- (1) 「これからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針案」の作成  
主にメタデータ流通の高度化検討班で作成していたこれからの学術情報システムのメタデータ収集・作成方針案について、統合的発見環境、ILL に関する部分について執筆を行った。
- (2) NACSIS-ILL の軽量化・合理化のための軽微な改善についての提示  
次期 ILL まで持ち越さなくても良い比較的軽微な改修については、「NACSIS-ILL 改修の要望」としてまとめ NII に提案を行った。
- (3) 次期 ILL についての検討、海外 ILL の運用についての調査  
次期 ILL についての検討、海外 ILL の運用についての調査を実施した。また、10 月 6 日に、ExLibris 社より Alma の ILL 機能、Rapid ILL についてのデモンストレーションを受け、機能の確認等を実施した。

### 3. 図書館システム整備班

- ・ 活動概要

Alma によって構築されている「共同利用システム」のデータ共有のあり方について検討を行い、2022 年度の運用開始に向け、主としてライセンスデータをめぐる、運用上の課題解決を図ったほか、タイトルデータなどの提供方法についての検討をおこなった。また Alma を「図書館システム」として、国立の大規模大学で採用した場合の運用を検証するため、北海道大学のワークフローを用いて、システムとしての適応性を調査した。そのほか Alma を機関リポジトリのプラットフォームとして運用する場合のメタデータのあり方や実装のための課題について、検討を行った。

- ・ 活動詳細

- (1) 「共同利用システム」の JUSTICE ライセンスデータを「図書館システム」と共有する際について、以下の方式が実現可能であることを確認した。
  - ① 「共同利用システム」によって構築されたデータ共有サイトを経由したダウンロードサービス

- ②「図書館システム」から、「共同利用システム」の API を経由してライセンスデータを取得するサービス
- ③「共同利用システム」のコンソーシアム向けデータ領域であるネットワークゾーンにライセンスデータを配置することで、コンソーシアムに参加している「図書館システム」(Alma) から直接参照し取得できるサービス

(2)「共同利用システム」の JUSTICE パッケージのタイトルリストは、「図書館システム」との間で共有する際の活用方法について検討を行い、以下のような結論を得た。

- ①KBART 準拠のタイトルリストを提供することで、「図書館システム」あるいはリンクリゾルバ等の各図書館が利用するシステムに取り込むことができ、JUSTICE を通じて提供される電子ジャーナルや電子ブック等のタイトルとライセンス情報を紐づけつつ、各図書館が利用するシステム内で管理することができる
- ②OPAC 等の「紙」の書誌レコードとマッチングすることで、「紙」に加えて JUSTICE を通じて提供される電子リソースへのリンクをシームレスに形成することができる
- ③システムに取り込むことで、各図書館では JUSTICE パッケージのナレッジベース(タイトルとアクセス可能な年次、URLなどを組み合わせたデータベース)を構築することができるうえ、OpenURL と組み合わせることで、JUSTICE パッケージに対応するリンクリゾルバとして機能させることができる

(3)北海道大学のワークフローをもとに、現行の「図書館システム」と Alma の機能を整理・比較し、代替可能か検証を行った

#### ① メリット

- ・ひとつのシステムで管理が可能(現行のような複数システム間の連携が不要)
- ・タイトルリスト管理、ライセンス設定などについて Alma の方が多機能
- ・統計情報の自動取得やアクセス単価の自動計算など、業務効率化が可能

#### ② 課題

- ・契約データに保持できる項目が少ない
- ・年度ごとに契約情報を管理できない

#### ③ まとめ

電子ジャーナル業務について、Alma には従来のシステムで使用してきた機能がす

べてそろっており代替可能だが、上記のような課題もある。それゆえ Alma に移行する際には、既存業務を Alma に合わせて変更する、あるいは業務に合わせて Alma の機能を適切に選択するなど、発想の転換が必要である。

(4)「図書館システム」としての Alma で機関リポジトリを運用できるかについて、主にメタデータ流通の側面から検証し、以下のような結論を得た

①日本で事実上標準となっている JPCOAR スキーマでのメタデータ作成には、Alma は対応していないが、MARC21 にマッピングすることで、IRDB への連携を念頭においたメタデータ作成が可能

②Alma の MARC21 のレコードは、MARCXML に変換を行うことで、自身が構築する OAI-PMH サーバを通じて外部に提供することができるが、MARCXML をリアルタイムで、JPCOAR スキーマに変換することで IRDB との間でのデータ連携が可能

#### 4. ERDB-JP 運用作業

- ・ 活動概要

ERDB-JP と参加機関統合システムとの連携作業を進めた

- ・ 活動詳細

##### (1) ERDB-JP と参加機関統合システムとの連携

Salesforce を用いた参加機関統合システムとの連携について、年度内に以下の開発を予定している。

- ERDB-JP と Salesforce とのシングルサインオン連携

##### (2) ERDB-JP 統計 (2021 年 10 月 25 日現在)

- ・ ユーザ数：
  - パートナーA : 90
  - パートナーB : 47
- ・ コンテンツ数 : 20,811 タイトル

#### 5. 共同利用システム移行支援班

- ・ 活動概要

本プロジェクト広報にかかる検討を行った。

- ・ 活動詳細

- (1) 「図書館システム・ネットワークプロジェクト 2022」プロジェクト名と Web ページの確認

6月末に、slack 上にて特設サイトの様式の確認及び、共同利用システムのプロジェクト名の原案を検討したほか、共同利用システムの概要 Web ページ案の内容と方針について検討を行った。

以上